講 演 会 要 旨

開催日：2001年6月20日（水）午後3時～午後5時
会　場：神奈川大学人文学研究所資料室（17号館216号室）
講演者：ホイト・ロング氏（ミシガン大学東洋言語文化学部）
演　題：「日本の環境文学と『自然』その概念
　　—比較環境文学の可能性と困難さ—」

アメリカにおける環境文学・エコクリティシズムの発達は，主として1960年代の環境問題の表面化とそれに対する環境文学の盛り上がりに始まる。1980年代後半には環境文学研究が活発となり，1990年代に入ってからは，環境文学とエコクリティシズムの学者が増えている。1992年にASLE (Association for the Study of Literature and Environment) という学会が正式に創立された。

ここで，環境文学とは簡潔には人間社会と自然環境との関係を主な題材として書かれた文学作品であり，ヘンリー・ソロー，ジョン・ミュア，レーチェル・カーソンなどが代表的である。しかし，ローランス・ビュールなどは環境文学をどう定義すべきかにより詳しい指針を挙げている。これに対して，エコクリティシズムとは，自然に焦点をあてて，環境と人間の関係を中心に作品を分析する文学の解釈方法である。

こうした，環境・文学評論はアメリカから日本にももたらされ1994年には環境・文学会 (ASLE-Japan) が設立されている。

アメリカから日本へというプロセスにおいて日本における環境・文学評論には2つの一般化論が発生する傾向がある。1つは，オリエンタリズム的な一般化論であり，もう一つは西洋に解決があるという一般化論である。前者は，近代化以前の日本文化や伝統に今の環境問題を解決するための手がかりがあると考えるもので，後者は西洋の文化に解決方法を探るべきであると考えるものである。しかし，いずれの一般化論においても，近代を看過してしまう点と，「自然」という概念の多様性を隠蔽するという点で問題があると考えられる。

日本における環境・文学評論の本来のあるべき姿は，日本文学を通して，「自然」という概念の多様性・多義性を知ることであると考える。

（文責：松本安生）